

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 四世鶴屋南北研究

氏 名 片 龍雨

本論文は、江戸後期の歌舞伎作者である四世鶴屋南北（宝暦5年〈1755〉～文政12年〈1829〉）について、新しい視座からの作品論を試みたものである。

本論文は、「趣向の個性化」、「〈世界〉の利用」、「台帳と戯作」の三章から成る。

第一章「趣向の個性化」では、南北の趣向の特徴を述べた。歌舞伎の内容を新しくする趣向には、作者の特徴が表れているからである。南北の立作者としての地位が安定したのは、文化5年（1808）以降のことであり、初期の南北は初春狂言の二番目や夏狂言、あるいは滑稽、怪異の場面を描いた小幕を執筆するにとどまっていた。従来の研究では文化5年以降の作品が主に扱われており、南北の初期の作品の研究は比較的手薄である。よって第一節と第二節では主に南北の初期の作品を対象にした。第一節の「滑稽—《館結花行列》の台帳における添削—」では、『^{やのじむすびはなのぎょうれつ}館結花行列』（文化3年4月、中村座）の台帳における南北の添削箇所を分析し、筋とは絡みにくい独立した一つの見せ場が中心になっていることを確認した。立作者になったばかりの南北には、立作者として作品全体の筋を十分に統括することができず、場面と場面の面白さを重視する三番目作者以前の慣習が、まだ残っていたからである。

第二節の「反復される趣向—幽霊と毒薬—」では、『^{わかざかりへいけものがたり}壮平家物語』（文化4年11月、市村座）に見える滑稽な幽霊と毒薬の失敗という趣向を例に取り、文化初期の南北が、どの筋、どの役者にも繰り返して使える趣向を試していたことを指摘した。南北の作品に見える趣向の特徴は、幽霊が登場する恐ろしい場面については初世尾上松助、滑稽な場面については、坂東善次、惣領甚六というように、特定の役者と結びつけて言及されてきた。しかし南北は、滑稽な幽霊と毒殺の失敗という、個々の役者の個性を気にせず使える趣向をたびたび用いることで、自分の思い通りの作劇を可能にしたと言える。

第三節の「小道具の利用—犬を中心に—」は、従来研究されていなかった小道具の犬に注目し、南北の小道具の利用の特徴を論じたものである。犬は、人と親しい庶民的な動物であるため、狂言作者にとっては使い勝手がよかったと思われる。加えて小道具の犬は、役者が中に入

り狂言作者の指示通りに演技ができる点で、役者でありながら小道具でもある。南北は、犬を使い、舞台の雰囲気を作ったり、役者を引っ込ませたり、時には金を運ばせたりするなど、一人の役者に等しい仕事をさせている。南北は、自分の意志で自由に動かせる犬を作品の中に仕込むことで、積極的に自分の存在を訴えようとしたとも考えられる。

第二章「〈世界〉の利用」は、南北の世界の利用について考察したものである。世界は、歌舞伎作品の背景と基本的な筋を決めるもので、その利用の分析により影響関係のある他作品との相違点が見えるからである。第一節「〈世界〉と緋い交ぜ」では、まず、南北の作劇法を説明するときによく使われる緋い交ぜの意味を再確認し、「緋い交ぜ」が、複数の筋を交互に並べるという意味から、複数の「世界」を融合させ、一つの「世界」を形作るという意味へ移り変わったことを確認した。そして『彩入御伽草いろいりおとぎぞうし』(文化5年閏6月、市村座)と『隅田川花御所染すみだがわはなのごしよぞめ』(文化11年3月、市村座)における緋い交ぜの手法を比較した。南北が立作者の地位を確立して間もない時期に書かれた前者は、各世界の筋をさほど細かく分解はせず交互に仕組んでおり、立作者の経験を積み重ねた後の時期に書かれた後者は、より細分化された世界、つまり「場面」を交互に仕込むという形になっている。南北は、一つの完結したストーリーの「場面」を並べることにより、複数の筋を複雑に展開しながら、同時に筋が通っている作品を作り上げることを可能にしたのである。

第二節「曾我の世界と鬼王貧家一鬼王と赤沢十内一」は、南北が鬼王貧家の場の主である鬼王の性質を変えることで、貧家の場を新しく見せる一方、赤沢十内に貧家の場を継承させ、「貧家」の場から「対面」に繋がる曾我狂言の骨格を維持していることを明らかにしたものである。南北の曾我狂言における鬼王は、道外や実悪の役者が演じることが多く、主君のために犠牲になる従来の姿から脱皮し、自分の欲望に忠実に生きる当代風の役が変わっている。一方、貧苦に苦しみながらも主君の曾我兄弟の夜討ちを成功させようとする貧家の場は、赤沢十内が演じている。南北は、貧家の主を鬼王の役から派生した赤沢十内に変えることで、毎年演じられる曾我狂言を新しく見せることができたのである。

第三節「座組と〈世界〉一文政八年度中村座の場合」は、個別の作品の研究が主流である状況を踏まえて、一年を通しての各作品の連関を考察するために、文政8年度(1825)の中村座の顔見世狂言から盆狂言までの作品を、世界と中村座の座組との相関関係を中心に分析したものである。南北は、世界を定める祭に座組の顔ぶれを最優先し、また役者の長所をさら

に目立つように作劇することはもちろん、役者の短所になりかねない箇所については、それを逆手にとって長所へと変える工夫をしていた。

最後の第三章「台帳と戯作」は、南北の作品を舞台で見る劇ではなく読み物として考察し、新しい視座を提示したものである。第一節「台帳のト書きと戯作の地の文」では、台帳のト書きと戯作の地の文を比較し、「心理描写表現」と「出の指示」の二つに絞り、台帳が読み物としても成立しうる要因を明らかにした。南北の台帳のト書きに散見する登場人物の心理を表すト書きは、役者の演技を指示する作者の意図であったのである。しかし詳細になったト書きが、読み物として台帳を読む読者にとっては、セリフだけでは伝わりにくい登場人物の感情の説明になっていると思われる。そして、役者の出の指示には、時間の経過に添って「この時」というト書きが使われるのが一般的である。しかし南北は、「最前より」というト書きを使い、場面の緊張感を維持しようとしたのだと思われる。このようなト書きは、舞台上の役者の演技を文字で説明する機能を持つものだが、それが結果的に、台帳を読み物として読む読者の理解を手助けすることになったのである。

第二節「『東海道四谷怪談』と読み物—その周辺作との相違—」は、『東海道四谷怪談』（文政8年7月）と互いに影響し合った読み物を比較し、その相違点を論じたものである。お岩の話は、実録体小説『^{よつやぞうだん}四谷雑談』（成立年未詳）、黄表紙『^{ももんがこんかいだん}模文画今怪談』（天明8年〈1788〉刊）、読本『^{つねよものがたり}勧善常世物語』（文化2年刊）、読本『^{しもよのほし}近世怪談霜夜星』（文化5年刊）により江戸中に知られ、歌舞伎『東海道四谷怪談』の上演後、合巻や読本として再生産されている。歌舞伎『東海道四谷怪談』の上演を機に変わったのは、家の話から個人の話に変わることによって仲人の存在感が小さくなったこと、累と阿国御前の趣向が取り入れられた結果、特徴のない亡霊の顔をしていたお岩の顔が個性のある恐ろしい顔に変化したこと、脇筋であったお岩の密通の話が宅悦という人物に移植されることで肥大化したこと、の三点に要約できる。

第三節「合巻をめぐる諸問題—姥尉輔・亀東・鶴屋南北—」では、南北が合巻を手がけた理由を、当時の出版情勢と南北の動向を基に推察した。南北は、南北と南北門人亀東の名義で、数作の合巻を手がけている。まず、文化5年から文化9年まで南北が姥尉輔の作者名で合巻を発表した理由については、版元伊賀屋勘右衛門が、二世常盤津文字太夫の死後、常盤津の正本が出版できなくなり、南北に合巻執筆を勧めたという外在的な原因と、立作者になかなか出来なかった南北が自分一人で自由に趣向を仕組むことができる合巻の執筆に魅力を感じていたと

いう内在的な原因の、二つの可能性が考えられる。文化9年以後、合巻の刊行を休止していた南北は、文政5年から南北門人亀東の名義で、文政9年からは鶴屋南北の名義で出版を再開する。その理由は、南北の二人の孫、南北孫太郎と勝田亀岳のためだと思われる。南北は、狂言作者としての修行を始めていた孫太郎のために、そして幼少より絵をよくした亀岳を将来画工にするために、合巻の出版を再開したのだと思われる。『怪談岩倉万之丞』(文政11年)と『怪談鳴見絞』(天保2年〈1831〉)は、文政8年7月『東海道四谷怪談』の大当たりの影響で上梓されたとされるが、実録体小説『四谷雑談』や読本『勸善常世物語』の直接的な影響が確認できるなど、役者を中心に脚色された『東海道四谷怪談』とは一味違ったものとなっていることを指摘した。

補論「《例服曾我伊達染》の台帳の原姿」では、南北の小道具の利用をヒントに『鶴屋南北全集 第十二巻』(三一書房、1974年)所収の『例服曾我伊達染』の台帳の順序を正した。唯一の現存台帳である岩瀬文庫蔵本の冊順に乱れがあったため、それを底本とした全集の冊順にも乱れが生じてしまったのだと考えられる。台帳は、貸本屋本が主であり、完本でないものも多いので、その完全な形を探ることは決して容易ではない。本作の校訂において乱れが生じた第一番目二幕目は、八回も舞台が変わり、かなり複雑な筋であるので、さらにその順番の齟齬が目立たない。補論では、小道具を利用し前後の場面を緊密に結びつける南北の作劇法を手がかりにして、底本の間違った順番や場割を正すことができた。